

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2020年度研究成果報告書

| | | | |
|--|---|----------------|------------------|
| 研究科名 | 立教大学大学院 | 文学研究科英米文学 | 専攻 |
| 研究代表者 (2021年3月現在 のものを記入) | 在籍課程・学年・学生番号 | 氏名 | |
| | <input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年 (学生番号: 20PB001R) | 及川 英 印 | |
| 指導教員 | 所属部局・職 | 氏名 | |
| | 文学部・教授 | 新田 啓子 印 | |
| 自然・人文・社会の別 | 自然 ・ 人文 ・ 社会 | 個人・共同の別 | 個人 ・ 共同 名 |
| 研究課題 | Edith Wharton, <i>Summer</i> における家族表象研究——「養子縁組」・「結婚」・「出産」を中心に | | |
| 研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2021年3月現在 のものを記入 | 在籍研究科・専攻・課程・学年 | 氏名 | |
| | 文学研究科・英米文学専攻博士課程 後期課程 1年 | 及川英 | |
| 研究期間 | 2020 年度 | | |
| 研究経費 (1円単位) | (支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円 | | |

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Edith Wharton, *Summer*(1917)に描かれる、主人公が養父と結婚し、別の男との間にできた子を出産するという結末を、女性主人公の主体性発揮が読み取れるものとしてフェミニズム批評の文脈から再評価することを目指すものである。作中に描かれる「養子縁組」、「結婚」、「出産」という家族形成の営みをアメリカ家族史や、ジェンダー研究の見地を参照することで、作中の「家族」像の独自性と、そこに込められた女性主人公の生存戦略と自己実現の可能性を探求した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ Edith Wharton } { 女性キャラクターの主体性発揮 } { フェミニズム批評 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Edith Wharton の中編小説 *Summer* の主人公 Charity Royall のキャラクター表象を、フェミニズム批評の文脈において主体性発揮という点から再評価することを試みた。主人公がロマンスに敗れ、子を身籠った末、養父 Royall との結婚を選択するという筋書きをもつこの小説は、主人公の主体性が、家父長制イデオロギーに収奪されるさまを描くかに見え、そこに論争が生じてきた。対して本研究では、養父との結婚を、家族形成に向けた主人公の主体的行為として読解することを目指すものである。さらに、このキャラクター研究で得た視座を、Wharton の他作品や他作家の研究にも応用することで、特に、Wharton の代表作の一つ *The Custom of the Country* (1913) と、Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables* (1851) を対象として、研究を体系化する作業に新たに着手した。*Summer* 研究の成果は、一本の論文として公開した。以下に本研究の概要を三点に分けてより具体的に説明する。

(1) 「家族」という規範性——養子としての主人公

これまでの *Summer* 研究においては、Charity の婚外交渉による妊娠や、墮胎の中止、そして養父である Lawyer Royall と結婚するという結末から、Elizabeth Ammons をはじめとする批評家たちは、この主人公の主体性の欠如や Royall の父権の突出を指摘してきた。しかし、結末に描かれる家族形成を一概に主人公が家父長制に回収されるものとして断定することはできない。なぜなら、この結婚は、ロマンティック・ラブに則って交わされたのではなく、彼女自身と子供の生存を究極の目的とした共同体形成として解釈できるからである。この結婚は、同時に、彼女の子と Royall の養子縁組を意味している。Charity 自身、Royall に引き取られた過去をもつため、作中で二度、非血縁の家族形成が描かれることになる。「養子縁組」、「出産」、「結婚」という行為を、アメリカ家族史に基づく歴史的なアプローチとジェンダー／フェミニズム批評から練り上げられた思想的アプローチを併用した方法で分析することにより、この作品における結婚表象が主人公の主体性欠如を表すのではなく、主体的生存戦略の一つとして読める可能性を追究した。つまり、最終的にこの作品が描く家族像とは、再生産を究極目標として結婚、出産が一直線に結ばれるロマンティック・ラブ・イデオロギーから逸脱した、非血縁の家族なのである。したがって、主人公がこの結婚によって獲得する家族的共同体が、所謂、近代家族像から逸脱していることの意義を概念化し、この共同体形成の営みを、女性主人公の主体的行為の初動として評価することを狙いとしたりした。

まず、この作品に繰り返し描かれる養子縁組を検討するうえで重要なのは、主人公が孤児であったことと、それゆえに付与された地域コミュニティ内でのマイノリティ性である。Carol Singley が、アメリカ文学における養子の表象を体系化するなかで、庇護を受けることでハッピーエンディングを迎える養子というプロトタイプを指摘する。一方 Charity は、養父本人や引き取られた先のコミュニティで身の安全を脅かされたのち、彼らと交渉することにより、自身で安全を確立してゆくという点において、そのようなプロトタイプの養子像から差異化される。Charity は 5 歳の時に、The Mountain という被差別地域から、Royall によって North Dormer へと引き取られてきた。そのため、チャリティは実際には The Mountain で暮らしていた時のことは記憶がないにも関わらず、Miss Hatchard をはじめとする North Dormer の住人から、被差別地域出身であることを強く意識させられている。Hatchard とは Royall と同様に町の有力者で、North Dormer の保守的な規範意識や閉鎖性を体現する人物であり、主人公の規範意識の形成や帰属意識の乏しさを生むのに大きな影響を与える人物である。Hatchard は、Charity が恥ずべき場所である The Mountain からもらわれてきたことをしばしば引き合いに出し、養父への感謝と沈黙を強いる。このようにチャリティは周囲からは同胞とは認められず、つねに他者化されている。Charity が North Dormer に来てから七、八年後、Royall に性行為を強要されそうになるという出来事が起きた際、ここでもまた Hatchard は彼女に沈黙を強いたのである。チャリティは Hatchard に、彼のもとを離れたいと告げたが、Hatchard は何が起きたのか勸付いたうで、Royall への恩を忘れるなど声を掛けるだけである。Royall の家庭内に養父の性暴力の危機を認識しながらも、Charity を助けるどころか出自を引き合いに出し沈黙を強いるのである。そこで Charity は、Royall から自立することを決意し、Hatchard の管理する図書館で働けるよう、Royall の口利きでその職に就く。つまり、The Mountain 出身の養子として North Dormer にいる限り、常に Charity はマージナルな存在として疎外されるのである。しかし、町で一番の権力者である養父と、非血縁ではありながらも、「家族」として繋がることにより、安全の獲得を辛うじて成し遂げている状態なのである。

(2) ロマンティック・ラブの不可能性

自身の出自が原因で Charity が抱える困難は、この小説のメインプロットでもある Lucius Harney とのロマンスに影を落とす要因となる。この小説は一見、異性愛ロマンスを軸とした物語の体をとるが、実際には主人公の恋愛は成就せず、ロマンスの相手とは別の異性と結婚する。ロマンスの失敗が誘惑小説というジャンルにおいて描かれる場合、主人公が妊娠してしまい、産褥死するというパターンが見受けられる。あるいは自然主義的な傾向が強い作品の場合には、恋に落ちた女性主人公は転落の一途をたどり、娼婦になるか身投げをするなどの悲劇的な結末が一つのパターンとして挙げられる。したがって、主人公が養父と結婚することを選び、婚外交渉により別の男との間に身ごもった子を育てるという本作の結末は、このパターンにあてはまらない。本研究では、その特異なプロットを駆動する要因を、Charity のキャラクター造形から検証した。

Barbara Welter によって概念化された、「敬虔さ」、「純真さ」、「家庭的であること」、「従順さ」の 4 つの要素から成る、「真の

研究成果の概要 (つづき)

女性礼賛」という、19 世紀アメリカにおける女性の理想的資質を参照することで、おそらく Charity が作家によって意図的にそのような女性像から逸脱するよう造形されていることを詳らかにした。特に「純真さ」に関しては、彼女の出自がそれを脅かす点が重要である。North Dormer において、The Mountain では一夫一婦制の結婚制度が成立していないようであること、すなわち、乱交的コミュニティであることが認識されていた。さらに、Charity の母 Mary とは、Nettleton という町出身ながら The Mountain の男と結ばれた女性であったことと、この事実が Charity を除く North Dormer の住人にとって周知の事実であったことが明らかになる。つまり、Mary の性的放縦さは、North Dormer の男たちが共通して抱くイメージであり、それゆえ、どんな男もメアリーの娘を妻とするはずがないのである。したがって、North Dormer にいる限りマウンテンの血を引くことは、性的に逸脱した放縦さや淫乱といった烙印を押されるため、彼女が妻として選ばれることはないかと悟るのである。したがって Charity は、North Dormer にいる限り、一人の相手と恋に落ち、その相手と結婚し子を産み育てるというロマンティック・ラブの成就が困難なキャラクターとして造形されているのである。

(3)「家族」形成の主體的決断

Charity の出自によるコミュニティからの疎外やロマンスの失敗の経験は、翻って、出産と結婚を決断するための動機となる。彼女は中絶手術を受けに行くものの、意思を翻し、出産する決意をする。母親となることを決意すると Charity は、「二度と自分自身を独りぼっちだと感じることはなく、「あらゆることが突然はつきりと、単純に見え」、自分が Harney の妻になることを思い描き苦しむこともなく、いまやこの子供の母親である」ことを実感するのである。これは、Royall から最後のプロポーズをされる前の出来事であるため、彼女は結婚よりも先に、すでに出産を決意している。さらに、出産する決断は彼女にとって重荷になることはなく、彼女が幼少期から背負ってきた孤独を癒すものですらあった。つまり、養父との結婚という庇護を受ける意味が前景化する家族形成以前に、彼女は自ら出産を決断することで、家族を形成しようとしていたのである。Royall との結婚の直後、彼から買い物代を貰った Charity は、中絶専門医の元へ、診察料の担保として半ば強制的に取られてしまったブローチを取り返しに向かう。このブローチは、Harney からプレゼントされたものだった。Charity は、これを「自分の赤ん坊のために」取り返すことにした。彼女はこのブローチを持っていることで、生まれてくる子の父親が「わからない」のではなく「ハーニーの子」であると証明できると考えたからである。彼女の行動には、血縁の親が不明の状態のまま育てられた自身の経験が反映されているのは明らかである。Charity の子も彼女と同様に養子となり、非血縁の家族を形成するが、自分の子供の親を明らかにしようとする主人公の意思に基づいたきわめて主体的な、子供のアイデンティティの基盤を形成しようとする営みである。

この非血縁の家族形成のもう一つの重要な性質は、夫婦となる Royall と Charity の関係性である。Royall は、妊娠している彼女に、保護されることの必要性を論じ、二人は結婚する。さらに結婚初夜、Royall と性交するのを密かに恐れる Charity の予想は外れ、彼が Charity に性行為を強要することはない。彼が自身の老いと分別を強調していることから、おそらく今後も彼らには性的な関係が結ばれることはなく、夫婦関係を継続していくことが予想できるのである。つまり、他の男との間に子を身籠った彼女との結婚は、ロマンティックな情愛と、その結果として再生産を期待する近代的夫婦関係から逸脱するものであり。この結婚によって、Charity は妻であり娘でもある存在となり、彼女の子は、彼の娘でもあり孫ともなることで、表面的には父・母・子から成る核家族を形成しながらも、血縁を前提とする近代核家族像からは逸脱した「家族」を形成するのである。このように「家族」という一つの規範性を獲得することで、Charity は North Dormer における安全が保障される。あくまでも彼女が主体的に意思決定することで「家族」を形成する様子には、マイノリティ性を帯びた女性主人公の生における駆け引きと生存戦略を読み取る事が可能であろう。

本研究では、*Summer*をメインテキストとし、女性主人公の主体性発揮の可能性を、歴史的・文化的背景を参照しながら探求した。この過程で得たWharton作品の女性キャラクター研究という切り口をさらに体系化すべく、研究の次の段階として *The Custom of the Country* の主人公 Undine Spragg という女性主人公を Charity に続く研究対象とした。この研究の成果は、2021 年度 5 月に日本英文学会において口頭発表する機会を獲得した。そののち、論文化し投稿を予定している。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- (1) 及川英、「Edith Wharton, *Summer* における主人公 Charity Royall の家族形成と主体性発揮」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』、第 22 号、2021 年 4 月発行予定。

② 該当なし

③ 該当なし

④ 学会発表

- (1) 2020 年度立教英米文学会にて発表予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となったため、英米文学専攻内の第 4 回方法論にて同内容の発表を行った。発表タイトルは「「交渉」する女——Edith Wharton, *The Custom of the Country* におけるフェミニスト・リーディングの余剰を読む」、2020 年 12 月 9 日、オンライン開催。